

---

# 赤と青の神話 一章

深江 碧

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

赤と青の神話 一章

### 【Zコード】

Z7556X

### 【作者名】

深江 碧

### 【あらすじ】

地上に生まれ変わった水の女神は、化け物の姿で、深い森の中に住んでいた。

近隣を治める王は、彼女を討伐しようと何人の兵を森へ送ったが、誰も彼女を倒せるものはいなかった。

そんなとき、三人の若者が現れ、化け物を退治しようと名乗りを上げる。

王は喜び、見事化け物を倒したものには、自分の娘である姫と結婚させようと言いつのだった。

「赤と青の神話 序章」の続きです。  
長くなりそうなので、一章」とに区切っています。  
よろしくお願ひします。

一章 森の化け物

彼女は世界にあるすべてのものが憎く、地上に生きるすべての生き物が恨めしかつた。

木々の間から差し込む木漏れ日も、湖面を吹き渡る風も、岸辺に打ち寄せるさざ波さえも、何もかもが嫌で仕方がなかつた。彼女は特に森に住む生き物やそのそばに住む人間が嫌いだつた。空高くさえずる小鳥も、木のうろに住む子鹿も、湖でゅつたりと泳ぐ魚も、畑を耕す村の親子も、彼女にとつては目障りで仕方なかつた。

暗く冷たく静かな世界。

彼女はそんな世界を望んでいた。

彼女のそんな思いからだろうか。

いつしか彼女の住む森は木々が高く生い茂り、小川の水は濁り、臭気を放つようになつた。

近隣の村々の井戸は枯れ、土はぬかるみ、畑の作物は育たなくなつた。

村人達は住み慣れた村を捨て、移住せざるをえなくなつた。

人の住まなくなつた村々は、木々に飲み込まれ、暗い森の一部となつていつた。

その地方を治める南の王は、作物が出来なくなつた原因を突き止めようと、幾人もの人々を森に遣わした。

しかし、誰一人として戻ってきた者はいなかつた。

そのうちに、その森には恐ろしい化け物が住むという噂がどこからかささやかれ始めた。

困り果てた王は、土地が腐る原因を突き止め、見事化け物を退治してきた者には、莫大な財宝と自分の娘であるフィエルナ姫を与えようつとお触れを出した。

腕に覚えのある者達が集まり、暗い森に次々と挑んでいったが、無事に戻つてくる者はいなかつた。

ある者は腕を、ある者は足を失い、息も絶え絶えに戻つてきた。戻ってきた者達は、口をそろえて森に住む化け物のことを語つた。人々はますます恐れ、一年もすると森へ行こうという者は誰もいなくなつた。

ある日、王の元に三人の若者がやつてきた。

森の化け物を退治しようつといつ若者三人に、王は喜び祝宴を開いてもてなした。

祝宴には数頭の子牛の丸焼きや森の果実、川魚などの料理が並べられ、広間は数百本のロウソクの灯りで真昼のよつて照らし出された。

王は酒の入った杯を片手に、ほろ酔い加減にフィエルナ姫に声をかけた。

「お前の花婿が、この三人の中から見つかるかもしれないぞ。森の化け物を倒すほどの勇氣あるものが、次の王になるのだからな」王はそういうつて豪快に笑う。

フィエルナ姫は広間を見渡し、そばにいた若者に近づいていった。一人目の若者は、ヒーネと言う貴族だった。

彼はうやうやしくひざまづき、フィエルナ姫の手に口づけする。「お可哀想な姫、すぐにわたしが化け物を退治して、お父上の悩みを解決して差し上げましょう。そしてその晩には、ぜひわたしの妻になつてください」

フィエルナ姫はお辞儀をして、おしゃべりをしている人々をすり抜けて行く。

広間の隅のテーブルの前で酒を飲んでいた若者に声をかけた。

二人目の若者は、ケー・ディンと言う傭兵だった。

彼は大きな体で見下ろすように、無愛想に頭を下げる。

「森に住む化け物を退治すれば、莫大な金貨が手に入るといふのは本当かい、姫さん。本当にそうかどうか、領主に念を押しておいてくれないか?」

フィエルナ姫はケー・ディンに、父は約束を破らないと言つて、広間を見渡した。

広間のどこを探しても三人目の若者が見当たらない。

フィエルナ姫は近くの人々に、三人目の若者の居場所を尋ねた。ある者が、広間を出て行くのを見た、と言い、フィエルナ姫は若者を探しに出かけた。

広間を出ると、フィエルナ姫の耳に物悲しい豊琴の調べが聞こえてきた。

豎琴の音に導かれるように、廊下を曲がり、塔の階段を上へ上へと登つていいく。

塔の最上階に一人の若者が月明かりに照らされて座つていた。

三人目の若者はクロフと言う吟遊詩人だった。

クロフはフィエルナ姫の姿に気付くと、豎琴の手を休め立ち上がる。

「『機嫌麗しゆう、姫。』の度はどのよつな『用で』『まぢ』『いらし  
たので』『どうか？』

フィエルナ姫はクロフの前まで歩いていくと、他の若者にしたのと同じ質問をした。

「あなたはどうして森の化け物を退治しようと思つたのです？ 命  
が惜しくは無いのですか？」

するとクロフは黙り込み、暗い空に目を向けた。

夜空には白い月がぽつかりと浮かんでいた。

「命が惜しくないと言つたら、嘘になりますね」

クロフは夜空から視線を戻し、月の光に照らされた赤金色の瞳で  
フィエルナ姫を見つめる。

「しかし、ぼくにはそれをやり遂げなくてはならない理由があります。太陽の女神様がそうするように神殿に啓示を下されたのです。そうしてぼくは地方を巡る神官、吟遊詩人として、動物や小鳥たちに導かれ、ここにやつてきたのです」

「まあ、それではあなたがここにいらしたのも、太陽の女神ラナン様のお導きだというのですか？」

フィエルナ姫は改めてクロフの顔を見つめた。

燃えるような赤い髪が印象的な、端整な顔立ちをした若者だった。「何という偶然でしょうか。わたくしも先日、女神様を夢で見ました。これからここにやってくる若者を手助けするようにと」

フィエルナ姫はクロフの手助けがしたいと思い、父親である王に出来る限りの援助をするように頼んだ。

王は若者達に馬や食料、化け物退治に必要と思われる武器や防具を授けた。

貴族のヒーネには、噴火口から引き上げた鉄で打った剣を。

傭兵のケーディンには、岩の中から掘り起こされた金属で鍛えた盾を。

吟遊詩人のクロフには、聖なる宿り木で編んだ靴を手渡された。

次の日の朝、三人は馬を駆り、早速森へ向けて出発した。

しかし森へ向かう途中、貴族のヒーネがフィエルナ姫を他の二人に取られたくないと思い、ある提案をした。

「このまま三人でそろって森の化け物を退治すれば、簡単に倒すことが出来るだろう。しかしそれでは姫も財宝も三人で分けないといけない。財宝はともかく、姫を三人と結婚させるわけにはいかないだろう？ そこでどうだ？ 一番早く森に着き、化け物を倒した者が姫も財宝もすべて手に入れるというのは」

少しでも多くの財宝が欲しかったケーディンは賛成した。

内心では姫と結婚して、この南の国を治めるのも悪くないと考えていた。

それに対し、クロフは反対した。

化け物の正体がわからない以上、むやみに別々に行動するべきで

はないと考えたのだ。

しかし二人は聞く耳を持たなかつた。

さつさと馬を走らせ、我先にと荒野を駆けていつてしまつた。

クロフは馬を走らせ二人の後を追つたが、森にたどり着く頃には二人を見失つていた。

クロフは馬の手綱を木に結びつけ、目の前に広がる広大な森を見上げた。

深い緑の森は丘の彼方まで広がつてゐるかのように思えた。

するとどこからか赤い小鳥が飛んできて、クロフの肩に止まつた。  
「太陽の女神様の言伝です。ここにあなたの求めるものがあります。  
さあ森にお入り下さい」

それだけ言つと、赤い小鳥はどこかに飛んでいつてしまつた。  
クロフは辺りを見回し、一步一步慎重に森へと入つていつた。  
森は厚い木の葉に覆われ、ほとんど太陽の光が届かない暗闇だつた。

地面の土はぬかるみ、沼地のようになっていた。

しかし王から授けられた聖なる宿り木で編んだ靴のおかげで、平地を歩くように苦もなく進めた。

しばらく行くと、馬のいななきや人の叫び声が聞こえた。

「助けてくれ！」

クロフは肩にかけていた豎琴を背負い直し、腰の短剣に手をかけ小走りに森の奥へと急いだ。

空の開けた場所に、馬の鼻面とヒーネの頭だけがのぞいている。クロフはヒーネの側に走り寄ると、両手を泥の中に突っ込んだ。「た、助けに来てくれたのか？」

ヒーネは涙ながらに訴える。

クロフは泥土を手でかき分け、泥の中に埋まつたヒーネの体を引つ張り出そうとした。

しかし宿り木の靴では一人分の体重は支えきれず、少しづつ泥の中へ沈んでいってしまう。

クロフは泥の中から両手を引き抜き、木の上を見上げる。近くの木に近づくと、その幹を登り始めた。

「おい、わたしを見捨てていくのか！」

ヒーネは頭だけを泥の上に出して叫んだ。

「何という薄情者だ！ 神に仕える吟遊詩人の名が聞いてあきれる！」

ヒーネはなおも叫び続けた。

声が枯れ始めた頃、不意に木の上から一本のつるが垂らされた。直後、クロフが木の上から飛び降りてきた。

「このつるにつかまつてください。つるを木の枝に引っかけて引つ張れば、あなたを泥の中から助けることが出来ます」

クロフは泥の中に埋まつたヒーネの体につるを巻き付け、木の枝

に引っかけ力の限り引っ張った。

ヒーネは泥の中から助け出され、クロフの両手を泥だらけの手でつかむ。

「ありがとう、君は命の恩人だ」

礼を述べると、ヒーネは森の奥を目標して歩き始めた。

「待つてください」

クロフは歩いていいとするヒーネを呼び止める。

「あなたの馬がまだ泥の中です。手を貸してください」

ヒーネは振り返り、眉をひそめる。

「この先は馬では進めないだろう？ 放つておけばいい」

そう言って、ヒーネはさつさと森の奥へ歩いていつてしまつた。クロフは仕方なく一人で馬を泥の中から引き上げることにした。

馬の胴体につるを巻いて引っ張り上げた。

前足が出たところで、馬は自分から泥の中から這い出た。馬は全身を振るつて泥を落とし、クロフを長いまつ毛の下からのぞく黒い瞳でじっと見つめる。

「ありがとうございます。助かりました」

クロフは馬の首をなでながら微笑んだ。

「気にならないでください。当然のことをしたまですか？」

「それではわたしの気が收まりません。何かお礼をさせてください。そう言えど、わたしが泥に沈んでいくとき、一匹の狐が近くを通りかかりました。狐はわたし達を見て意地悪く笑いながらこんなことを言いました。『泥の沼地は木を持って通れ。木の葉の中は火を持って通れ。泉の水は剣持て通れ』と」

クロフは口の中を繰り返しつぶやいた。

「それはいったいどういう意味なのだろう？」

腕組みをし、首を傾げる。

「さあ、わたしには何のことかさっぱりわかりません」

クロフと馬はお互い首をひねっていたが、いつこうに何のことかわからなかつた。

「狐の言つくらいだから、その言葉はきっと何か意味があるのだろう。でも森の奥には何があるかわからないから、君は森の外で待つていてください」

「しかし……」

馬はしばらくためらつたよつて足元の土をひすめで掘つていたが、クロフが馬の首を軽く叩くと、大きくいなつて元来た道を戻つていった。

クロフは森の暗闇を見据え、一步一歩確かめるよつて泥の道を歩いていく。

森の木々は鬱蒼と生い茂り、太陽の光が少しづつ薄らいでいく。ついに辺りは薄闇に覆われ、足下さえおぼつかなくなつた。そこで腰に下げた布袋の中から火打ち石と油を塗つた松明を取りだした。

松明に火を灯し、クロフは暗くぬかるんだ道をゆっくりと進んでいく。

しばらく進むと、薄闇の奥から低いうなり声が響いてきた。

クロフは身構えて、油断無く辺りを見回した。

うなり声は木々の上からとぎれとぎれに聞こえてくる。

それが男の声であることにクロフは気づいた。

手に持つている松明をかざし、木々の枝に目をこらす。

闇の中に浮かび上がつたのは、つるに絡め取られた人影だった。

クロフは松明を手に、そろそろと人影に近づいていった。

人影はクロフの姿に気が付くと、身じろぎして小さなうめき声を上げる。

それは森に来る途中で分かれたケー・デインだった。ケー・デインは首を動かすのが精一杯だった。

「すまないが、このつるを切つてもえないか？ 礼なら後でいくらでもする。だから助けてくれ」

クロフはケー・デインの求めにうなずいた。

しかしどうすればつるを切ることが出来るのかわからない。

ためしに短剣で斬りつけてみたが、太いつるにはわずかに傷が付いただけだった。

クロフは何か方法がないか、辺りを見回し考え込んだ。

少し離れた暗がりにはヒーネが頭までつるに覆われ、叫び声を上げている。

「早くつるを切つてくれ！ 礼なら後でいくらでもする！」

そこでふとクロフは疑問に思った。

他の一人がつるに絡め取られているのに、なぜ自分だけはそんなこともなくここまで来られたのだろう。

クロフは馬に教えてもらった狐の言葉を思い出した。

『木の葉の中は火を持て通れ』

クロフは松明に灯つた炎を見上げる。

そして恐る恐る松明の灯火を木のつるに近づけた。

何も知らないケー・デインは、財宝ほしに自分がつるの「と燃やされるのではないかと思つたようだ。

「おい、やめる。財宝なら全部あんたにくれてやつてもいいから、命だけは勘弁してくれ」

ケー・デインはつるに縛られた体を揺らし、もがいた。

「動かないでください。大丈夫、あなたに危害を加えるつもりはありません。少しの間じつとしていてください」

クロフはゆっくりとつるに松明の火を近づけていく。

するとそれまでケー・ディンの体を縛り上げていたつるが、すると解け始めた。

つるが急にほどけたので、ケー・ディンは支えを失い、宙に放り出される。

クロフが受け止める間もなく、ケー・ディンは木の枝をつかみ、両腕でぶらさがつた。

「松明、か？」

ケー・ディンの言葉にクロフがうなずく。

「思った通りです。このつるは火を怖がり、松明を持った者には巻き付かないようです」

ケー・ディンは片手で枝にぶら下がり、すぐさま肩にかけた革袋を探つた。

そこから松明の棒を取り出し、クロフの松明にかざし、火を灯した。

ケー・ディンは松明を持ったまま、体をひねり器用に太い木の枝に飛び乗つた。

「松明を持っていれば、あのつるはもう襲つてこないらしいな」

木の上からケー"デインの声が返ってくる。

木の上の灯りはやらぬらと森の奥へと進んでいく。

「待つてください」

クロフは木の上のケー"デインを呼び止め、もう一つの人影を指さす。

「彼をまだ助けていません。よかつたら、手を貸してください」

すると木の上から大きなため息が返ってきた。

「あんたがお人好しなのは想像が付いていたが、おれはそんなにお人好しじゃないんでね。森の入り口であいつを見つけたとき、おれはわざと助けないでおいた。それが何でかわかるか？　おれは故郷を出てもう八年経つが、傭兵という仕事柄ああいう人間はごまんと見てきた。ああいう奴は周りの人間の足を引っ張るだけで、何の役にも立たない口先だけの男だ。あんたもツキに見放されたくなかったら、さつさと見捨てる事だな」

クロフは暗闇から響くケー"デインの言葉にじつと耳を傾けていた。

「それでも、ぼくは彼を助けなければ。このまま見捨てていくことは出来ません」

クロフの真っ直ぐな瞳に、闇の中から諦めたような声が返ってきた。

「わかったよ。手伝つてやる。ただしこいつが足手まといだとわかつたら、おれは迷うことなくこいつを泥沼に放り込むからな」

ケーデインは松明を持って、森の奥から戻ってきた。

「おれはこいつを支えるから、あんたは下から松明の炎でつるをほどいてくれ」

クロフはうなずき、つるに絡まつたヒーネに近づいた。

下から松明を掲げると、木のつるはするすると解けていく。

ケーデインが木の上から片腕でヒーネの体を引っ張り上げる。

クロフはすぐに木の枝によじ登り、太い枝を選んで歩いていった。木の枝の上は所々緑のこけで覆われ、すべりやすくなっていた。

「彼は大丈夫ですか？」

クロフが近づくと、ケーディンは木の枝に横たわっているヒーネをあごで示す。

「気を失っているだけだ。良かつたな。騒いで泥沼に捨てずに済んだな」

ケーディンは闇に彩られた森の奥を見つめ、そちらに松明を向ける。

「このままここにいると、いつ松明が尽きて、木のつるに巻かれるかわたつたもんじやない。先に進むぞ」

黙つて遠ざかっていくケーディンの後ろ姿を見送り、クロフは気を失っているヒーネを肩に背負つ。

ケーディンはクロフをちらと振り返つただけで、それ以上何も言わなかつた。

かわりにクロフに歩幅を合わせ、松明で足下を照らしてくれた。太い枝の上を選んで歩き、進むにつれて細い枝が絡み合つていく。

やがて細かい枝が絡み合ひ木の葉の絨毯のようになつているところまでやつてきた。

そこで暗闇の端に松明の明かりでない光が見えた。クロフは光の差す方向を指さした。

「あれは、あの光は」

クロフの指さす方向を、ケーデインも見つめる。

「光だな。行つてみるか」

お互い顔を見合させ、枝の上を光の見えた方角へ進んでいく。はじめは白い粒のようにしか見えなかつた光も、近づくにつれて少しづつ大きくなつっていく。

ついには目の前一杯に白い光が広がつた。

満ちあふれた光の粒に、クロフは思わず目を閉じた。明るさに目が慣れてくると、クロフの立つているところが美しい湖の上に張り出している枝の上だとわかつた。

湖の水は青く澄み、中央の泉からは清らかな水がこんこんと湧き出している。

クロフは木の枝から降り、岸邊にある木の幹にヒーネを寝かせた。

「この湖の水はとても澄んでいます。でも」

クロフは岸辺に近づき、湖の水をすくい取つた。

「でも、ここには全く生き物の気配が感じられない」

近くで水をくもつとしていたケーデインを手で制す。

ケーデインは水に浸していた手を慌てて引っ込め、指を服のはしでふいた。

「何だ？ この水に毒でも入つてゐて言つのか？」

「いいえ、それはわかりませんが」

クロフは言いよどみ、湖を見渡した。

湖の周囲は草や藻がほとんど生えておらず、白い石といつて

た灰色の岩とが並んでいる。

「この湖は底が見えるほど水が澄んでいるのにも関わらず、魚一匹見当たらない。それはどうしてでしょうか？ この泉の水に毒が入っているのか、それともその逆か？」

クロフは湖の縁に沿つて歩き出した。

「この水は森全体を潤し、この水で木々が育っているというのなら、近くの土地で作物が育たなくなつたのも、土地が腐つてしまつた原因も」

クロフは頭の上に座り、湖の輝く水面に顔を映した。するとその頭上に黒い影が落ち、さざ波が立つた。

「上だ！」

ケーディンが鋭く叫ぶ。

クロフはとつさに腰の短剣を抜き放ち、上に刃を向ける。頭上に黒い影が覆い被さつてくる。

抜き身の短剣を通して、クロフの腕に重い衝撃が伝わつてくる。

辺りの空気が震えるほどのかん高い悲鳴が、クロフの耳に届く。いつまでも続くかに思われた悲鳴がやみ、手にかかつていていた重みもやがて無くなつた。

湖面を波立たせ、恐ろしい咆哮を上げた黒い影は、クロフの前にゆつたりと横たわつていて。

鈍く光る青みがかつた銀の鱗。

曲がりくねつた長い首。

人もゆうに飲み込めるほどの大好きな口からは赤い舌がのぞいている。

それは人の背丈の何倍もある巨大な蛇だった。

ただ青く澄んだ瞳だけは、神々しささえ感じさせる不思議な輝きを放つていた。

「人間がこの森に何の用だ」

大蛇は鎌首をもたげて言い放つ。

クロフはこの大蛇がこの森の守り神だと考え、丁寧に頭を下げた。「何らかの無礼を働いたのならお許しください。ぼく達はただ、作物が出来なくなつた原因をこの森に調べに来たのです。なにかござりませんか?」

大蛇はクロフの頭にかみつかんばかりに大きな口を開けた。

「ほう。人間にもわたしの言葉を解し、恐ろしいと思わない者がいるとは。その度胸は見上げたものだな。その度胸に免じて、今回はこの森に無断で立ち入つたことを許してやるつ。立ち去るがいい、人間」

大蛇は赤い舌をちらちらと出し、クロフの顔を見下ろした。

「そういうわけには参りません。ぼく達は作物が出来なくなつた原因を探りに来たのです。原因もわからないま、帰るわけにはいきません。もしあなたが何か知つてているのなら、教えてください」

クロフを見下ろしていた大蛇は、その赤金色の瞳を見て急に目の色を変えた。

「お前は。お前は火の神か？ 神々の命でわたしを殺しに来たのだな？」

大蛇は身を捩じらせて、クロフをにらみつけた。

「そんな、違います。ぼくはただ」

「知らない振りをするというのか。死の国に落ちたわたしが、神々は目障りなのだろう。多くの人間を殺してきたわたしが、邪悪だと言うのだろう。神々はお前を人間に転生させてまでわたしを滅ぼしたいのか！」

「違います！」

耳をつんざくほどの悲鳴に遮られ、クロフの声は届かなかつた。

大蛇の青い瞳はもう何も映してはおらず、狂気の光だけが宿つていた。

大蛇は巨大な尾を振り上げ、クロフに向かつて振り下ろす。

クロフは無意識のうちに短剣を頭上にかまえたが、大蛇の予想以上の力に体ごと吹っ飛ばされてしまう。

クロフは湖面に叩きつけられ、盛大な水しぶきを上げる。

咳き込みながら立ち上がり、声を張り上げた。

「話を聞いてください！ ぼくはあなたを殺しに来たのではありません！」

頭上から敵意のこもつた声が返ってくる。

「ならば何だというのだ。わたしのこの醜い姿を、天上の神々の前に引きずり出して、笑いものにでもしようというのか」

大蛇は湖面を渡す疾風のように走り、クロフに突進していく。

「それこそ、お断りだ！」

白い鱗で覆われた巨体で体当たりをくらわす。

しかしクロフは寸でのところで体を反らし、水に濡れた短剣で銀の鱗を弾き、受け流した。

「それは違います！」

大蛇は水中に潜り、クロフから距離をとる。

「ならば何だというのだ！ 何の目的があつて、この地上までやつてきたのだ！」

クロフは大蛇の問いに、しばしめためらつた。

「僕の本当の目的は、わからない。わからないけど」

わずかにうつむき、短剣の柄を握り締める。

「何か、もつと良い別の方法があるはずだ！」

クロフは短剣を手に、大蛇に向かつて走つていく。

宿り木の靴は水の上でも、平野を走るがごとく彼の足を進ませた。

大蛇は向かつてくるクロフにひるみ、体をよじらせた。

その一瞬の隙を、クロフは見逃さなかつた。

渾身の力で短剣を大蛇ののど元に突き立てた。

大蛇の首から赤い血がほとばしり、痛みのためか辺り構わず暴れ

回つた。

クロフは大蛇にはね飛ばされ、湖の岸辺に叩きつけられた。

「おい、大丈夫か？」

今まで眺めているだけだつたケー・ディンが、心配そうに駆け寄つ

てくる。

クロフは苦しげにうめき、ゆっくりと立ち上がる。

「ぼくは、大丈夫です。それよりも、彼女の怒りを収める方法は、何か無いでしようか」

「彼女？」

ケー・ディンは素つ頓狂な声を上げる。

「あの大蛇のことですよ。あの大蛇とこの水が、恐らく、作物が実らなくなつた原因を作つたのでしょう」

のど元に突き刺さつた短剣を引き抜こうと、大蛇は狂つたように頭を振り回している。

「そこまでわかっているのなら、あいつを倒しちまつた方が早いんじゃないのか？」

「果たして、そうでしょうか？」

クロフは訥然としない思いのまま大蛇を見つめている。

不意に水音がして、暴れ回っていた大蛇がこちらを振り返った。

青い瞳には憎惡の光が宿り、口からは紫の水滴がぽたぽたと垂れている。

「お前達など、骨の一片、肉の一枚片も残さず溶かしてくれる！」

そう言い放つなり、大蛇は口から紫の毒液を吐き出した。

毒の霧は近くの石に噴きかかるなり、白い煙を立ち上らせた。

クロフはとつさに顔を片腕でかばい、後ろにいたケー・デインを突き飛ばした。

片腕から白い煙が立ち上り、服が溶けあらわになつた肌は赤くただれでいる。

「やはり、殺すしか手はないな」

背後にいたケー・デインは短く舌打ちをする。

「でも、それは」

クロフはまだ躊躇つてゐる。

大蛇が息を吸い込み、再び毒液を浴びせかける。

クロフはとつさに後ろに飛び退り、ケー・デインから離れるように

岸辺を走つた。

「おい、これを…」

クロフが立ち止まつたところで、背後から声をかけられた。

飛んでくる物を目の端でとらえ、振り向きざまにそれをつかむ。

ケー・デインから投げられた物は、ヒーネが領主から授けられた一振りの剣だつた。

クロフは噴火口から引き上げられた鉄で打つたと言われる剣をゆっくりと引き抜いた。

その瞬間、クロフの頭の奥の何かが呼び起された。

心臓の鼓動が高まり、耳の奥で「うう」と血潮の音が響く。

肩から指先にかけて力が満ち、腕が別の意志を持ったかのようだ

った。

クロフは何かに取り憑かれたように、右手に剣を握りしめ、立ち尽くしていた。

「危ねえ！」

ケーディンが盾を構え走り寄り、クロフの前に飛び出した。

岩の中から掘り起こされた金属で鍛えたと言われる盾は、大蛇の毒液を浴びてもびくともしない。

「おい、大丈夫か？」

ケーディンは後ろを振り返り、言葉を失った。

それは今までの穏やかな雰囲気のクロフとはまるで違っていた。

赤い瞳は獰猛な獣のように輝き、髪は赤みを増し炎のようにならめいている。

何より側にいるだけで息苦しくなるような威圧感が辺りに満ち、ケーディンの首筋がちりちりと逆立っている。

ケーディンは口を開けたまま、瞬き一つ出来ずクロフを見つめていた。

業を煮やした大蛇は、大きく口を開けて突進してきた。

ケーディンは声を上げる間もなく、大量の水しぶきに視界を遮られ、何も見えなくなつた。

次にケーディンの耳に届いたのは、森の空氣をつんざくような大蛇のかん高い悲鳴だつた。

盾の影に隠れていたケーディンは、恐る恐る顔を上げて湖の様子をうかがつた。

目に飛び込んできたのは、湖面に映る一つの影だつた。

まるで水面を舞う木の葉のように、二つの影は音もなく揺らめいている。

ケーディンは盾を構えたまま、呆然として二つの影の動きを見て追つた。

クロフが剣を一振りするだけで、水面が泡立ち、大量の霧が湖面に立ち上る。

大蛇はその巨体をくねらせ、湖面を駆けるクロフを追つ。大蛇が一声うなると、湖面に水柱が立ち、その水滴がまるで意志を持ったかのようにクロフに襲いかかつた。

クロフは水の飛礫を剣の一振りで振り払い、大蛇の懷へ飛び込む。しかし剣を振るう直前で水の壁に阻まれ、刃は大蛇まで届かない。そんな攻防が数回ほど続いて、クロフの剣が水の壁に阻まれたときだつた。

クロフは剣を引かず、切つ先を水の壁に突き立てる。

両手で握りしめた剣先は、炉から取り出したばかりのように赤く、刀身からは白い炎さえ揺らめいている。

水の壁がごぼごぼと音を立てて沸騰し、水は白い霧として空中に霧散した。

剣の切つ先が白いもやを通り抜け、大蛇の白銀のうぶに突き刺

さつた。

森の木々を振るわせ、湖面が波立つほどい絶叫が辺りに木靈する。

大蛇の体は力を失い、湖の上にゆっくりと倒れ込んだ。

水しづきがケーディンの頬を濡らし、湖に広がる赤い染みが戦いに決着がついたことを物語つていた。

クロフは剣を片手に握ったまま、湖の中央に立ち尽くしていた。

湖面に浮かぶ大蛇は、首から血を流したままぴくりとも動かない。ケーディンは盾を手に、恐る恐る立ち上がった。

「やつたのか？」

ケーディンは大蛇とクロフとを見比べる。

クロフは放心したように、森の木々の間に広がる夕闇迫る赤い空を見上げている。

湖面は磨き上げられた鏡のように滑らかで、夕雲の流れる茜色の空をくつきりと映していた。

不意に水面の景色がいびつに歪む。

湖面が波立ち、水がケーディンの立っている岸辺の黒い岩に打ち付ける。

大蛇がゆつくつと首をもたげ、青く濁った田でクロフを見下ろしている。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7556x/>

---

赤と青の神話 一章

2011年11月1日09時22分発行